

介護老人福祉施設の施設内指導者による フットケア教育プログラム運用の効果検証

永井さつき

愛媛県立医療技術大学紀要 第19巻 第1号抜粋

2022年12月

介護老人福祉施設の施設内指導者による フットケア教育プログラム運用の効果検証

永井さつき*

Verification of Benefits on Foot Care Education Programs which Workers of Long-term Care Welfare Facilities Conducted as Leaders

Satsuki NAGAI

Keywords：施設内指導者，介護老人福祉施設，OJT，介護職者，フットケア

序 文

介護施設においては業務の多忙さや人員不足のため、教育をする職員や教育を受ける職員に時間的余裕がなく研修体制は十分とは言い難い現状がある¹⁾。そのため筆者は、介護老人福祉施設に勤務する看護・介護職者のケア技術向上のために、先行研究において筆者が考案・実施したフットケア教育プログラム（以下FC教育プログラム）の有効性について検証した。その結果、FC教育プログラムは看護・介護職者のフットケア技術の向上に有効であることが確認され、今後の課題として、組織内でお互いが学び合うことが可能となる体制作りの重要性の示唆を得た²⁾。

介護施設における職員教育の課題として、小木曾らは、職員は日々の業務の忙しさから心のゆとりがなく、教育の必要性を感じていない傾向がある³⁾と報告している。また丸山らは、人員不足のため忙しく研修体制が不十分なところも多く、人材育成は課題である⁴⁾と述べている。これらのことから介護施設での教育体制を構築する必要があると言える。

先行研究は、外部講師である筆者が指導者となりFC教育プログラムを実施した報告⁵⁾である。その際、加藤の報告にあるように、筆者も研修の目的や意図、受講者の属性などを事前に研修企画者の尋ね、その研修の目指す方向に向けた研修内容を組み立てた⁶⁾。さらに、受講者との意思疎通に時間をかけ、研修受講後の反応はアンケートなどを実施することで確認した。しかしこれをOJTで実施すれば、時間的、場所的制約がなく、研修

機会は日常的に得られる。さらに一人ひとりの状況に応じた効果的な教育を実施することができ、学習したことを仕事に転移しやすく、技術力向上の結果が分かりやすい⁷⁾というメリットがある。施設内講師であれば、研修時間以外でも指導することが可能であり指導の結果が分かりやすく、職員間の相互理解・信頼関係の深化にも繋がると考えられる。

本研究では、施設内指導者が実践するFC教育プログラムの運用効果を検証し、施設完結型教育体制の構築への示唆を得ることを目的とした。

用語の定義

看護・介護職者：介護老人福祉施設において、日常生活支援業務に携わる看護・介護職者で看護師、准看護師、介護福祉士、無資格介護職員をいう。

施設内指導者：先行研究におけるFC教育プログラムの既習者で、本研究においては指導者としてプログラムを実施する者をいう。

方 法

1. 看護・介護職者のフットケア教育プログラムの概要

FC教育プログラムは、プログラム①～⑥で構成される。プログラム①はフットケアに関する集合研修、プログラム②は参加者の課題を明確にするためのグループワーク（1回目）、プログラム③はフットケア技術チェックリスト（以下チェックリスト）を用いた技術指導

*愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科

前の個別の技術評価と技術指導、プログラム④はプログラム③終了後のグループワーク（2回目）、プログラム⑤は技術指導後の個別の技術評価、プログラム⑥はプログラム参加を振り返るためのグループワーク（3回目）である。

FC教育プログラムで使用するチェックリストは、20項目で構成され、それぞれの項目を5段階で評価し点数化する。得点が高いほど技術力が高いことを示す。なお作成には「足のケアの一連の流れ」⁸⁾「シャボンラッピングの注意点」⁹⁾「足浴・フットケアの留意点」¹⁰⁾を参考にした。

2. 研究参加者

A県内の介護老人福祉施設に勤務する看護・介護職者のうち、研究参加の同意を得られた受講者と施設内指導者を対象とした。なお、受講者は初めてFC教育プログラムを受講する者である。

3. データ収集法

施設内指導者によるFC教育プログラムの教育効果を検証するために、技術指導前後の受講者のチェックリストの得点をデータとした。

またFC教育プログラムの運用効果を検証するために、研究参加者に対し無記名自記式の質問紙調査を実施し、受講者によるFC教育プログラム受講についての自由記述と、施設内指導者によるFC教育プログラム実施の手応えや課題についての自由記述をデータとした。

4. 分析方法

FC教育プログラムの教育効果については、技術指導前後のチェックリストの得点をWilcoxonの符号付き順位検定を用いて比較した。解析には統計ソフトSPSS ver.25 for Windowsを用い、有意水準は5%とした。

FC教育プログラムの運用効果については、質問紙調査より得た受講者の自由記述から、施設内指導者によるFC教育プログラムの評価に該当する部分を抄出した。さらに、施設内指導者の自由記述からは、FC教育プログラム実施の手応えや課題等に関する記述をデータとして抽出し、類似性に基づきカテゴリー化した。なお、分析の真実性は研究経験の豊富な質的研究者のスーパーバイズにより確保した。

5. 倫理的配慮

愛媛県立医療技術大学研究倫理委員会の承認後（H30-019）、研究参加施設の承認を得て実施した。研究参加者には研究の主旨・方法、研究協力の任意性と撤回の自由、データの適切な管理、結果の公表などについて口頭と文書にて説明し、同意書への署名により同意を得た。

結 果

1. 研究参加者の属性（表1）

研究参加者のうち、受講者は介護職者28名中同意を得られた9名（32%）、施設内指導者は17名中同意を得られた6名（35%）であった。

受講者の背景は、男性3名、女性6名であり、平均年齢は39.6歳であった。職種は介護福祉士6名、介護員2名、相談員1名であり、現場での平均経験年数10.7年であった。

施設内指導者の背景は、男性2名、女性4名であり、平均年齢は41.8歳であった。職種は介護福祉士3名、介護員1名、准看護師2名であり、現場での平均経験年数は13.7年であった。

表1 研究参加者の属性

		受講者	指導者
性別	男	3名	2名
	女	6名	4名
平均年齢		39.6歳	41.8歳
職種	介護福祉士	6名	3名
	介護員	2名	1名
	准看護師	0名	2名
	相談員	1名	0名
平均経験年数		10.7年	13.7年

2. 施設内指導者によるFC教育プログラムの教育効果（表2）

得点の中央値は、プログラム実施前55.0点、プログラム実施後72.0点と上昇し、有意差が認められた（ $P < 0.05$ ）。また“必要物品を準備できる”“感染予防（手袋、エプロンの着用）”“足を観察する”などの8項目でプログラム実施後の得点中央値は上昇し、有意差が認められた（ $P < 0.05$ ）。

3. 施設内指導者によるFC教育プログラムの運用効果

1) 施設内指導者が実施したFC教育プログラムに対する受講生の評価

受講生からは、「技術指導は解りやすく教えてもらった」「工夫やポイントを教えてくれた」「要点を押さえて教えてくれた」「身近な指導者でやりやすかった」「昨年の参加者（施設内指導者）は手助けやアドバイスをくれた」などの評価を得た。

2) 施設内指導者によるFC教育プログラムの手応えや課題（表3）

質問紙調査において、施設内指導者が実施したFC教育プログラムの手応えや課題に関する記述は59件であった。それらを類似性に基づき分析した結果、7カテ

表2 施設内指導者によるFC教育プログラムの教育効果

n=9

技術評価項目	プログラム実施前		プログラム実施後		Z値
	中央値	±Q	中央値	±Q	
全項目の合計得点	55.0	±5.5	72.0	±2.8	2.524*
1 必要物品を準備できる	3.0	±0.5	4.0	±0.0	2.460*
2 患者に移動する目的と方法を説明し同意を確認する	3.0	±0.5	4.0	±0.5	1.342
3 体位を整える(安楽、保温等に注意)	3.0	±0.5	3.0	±0.8	1.994
4 プライバシーの確保(カーテン・掛物)	3.0	±0.3	3.0	±0.3	1.890
5 感染予防(手袋、エプロンの着用)	3.0	±0.3	4.0	±0.5	2.456*
6 足を観察する	2.0	±0.5	4.0	±0.5	2.414*
7 泡をつくる(泡の硬さ・量)	3.0	±0.5	4.0	±0.8	1.857
8 足の下に防水シート・バスタオルを敷く	3.0	±0.0	3.0	±0.5	1.081
9 泡の入ったナイロン袋に足をつける	3.0	±0.3	4.0	±0.5	2.271*
10 袋の上から片方ずつ指の間を洗う	3.0	±0.8	3.0	±0.5	1.000
11 片方の足の泡を拭いてナイロン袋の中ですすぎ湯をかける	2.0	±0.5	3.0	±0.0	2.333*
12 袋から出して水分を取りバスタオルを巻く(保温する)	2.0	±0.5	3.0	±0.5	2.070*
13 胼胝(たこ)・鶏眼(うおのめ)などの処置の必要性の判断	3.0	±0.5	3.0	±0.0	2.000
14 ヤスリを使って硬く黄色く変色した部分を削る	3.0	±0.5	3.0	±0.0	2.000
15 道具に合わせて相手との向きをとる(ニツパー or 爪切り)	3.0	±0.5	3.0	±0.3	2.000
16 スクエアオフに爪をきる	3.0	±0.5	3.0	±0.3	1.000
17 ヤスリをかける	3.0	±0.5	3.0	±0.3	1.890
18 1FTU手に取り適切な面積に両手を使って足に塗布する	3.0	±0.8	4.0	±0.0	2.333*
19 ケア中の対象への適切な声かけと観察	3.0	±0.8	4.0	±0.5	1.081
20 ケア終了時のねぎらいの声かけと体位を元に戻す	3.0	±0.5	4.0	±0.3	2.333*

各項目5点×20項目=100点満点

検定: Wilcoxon の符号付き順位検定、* p < 0.05

りに分類できた。以下、カテゴリーは【】、代表的な記述は「」内に斜体で示す。

【高齢者が、足がきれいになったことを喜び爪も気にするようになった】

このカテゴリーは、ケアを受けた高齢者が足を気にするようになったことを示している。代表的な記述は「足がきれいになったと高齢者が喜んだ」「爪を切ってと言ってくる高齢者が増えた」であった。

【受講者が足・爪をよく見て、異常があれば看護師に報告をするようになった】

このカテゴリーは、受講者が一生懸命フットケアに取り組んだことで足を気にかけ、しっかりと観察し異常があれば看護師に報告をするようになったことを示している。代表的な記述は「(受講者は)足の観察を気にかけてできるようになった」「(受講者は)むくみ、乾燥、白癬などを観察し、看護師に報告できるようになった」で

あった。

【受講者以外の職員も興味・関心を示したが、フットケアを実践することはなかった】

このカテゴリーは、受講者以外の職員が徐々にフットケアを気にかけて興味を持つようになったが、フットケアの重要性を十分に理解できず、ただ大変なケアと思い実践に至らなかったということを示している。代表的な記述は「受講者以外の職員が、入所者の足のことを話題にするようになった」「受講者以外の職員は、フットケアを理解せず大変と思いやろうとはしなかった」であった。

【指導者として受講者に教えるのは難しく時間調整も難しかった】

このカテゴリーは、指導者としての自信が持てない、指導時間が取れないなど同じ職場内で教え合うことの困難さを示している。代表的な記述は「自分も自信がない

ところがあり教えるのは難しい」「業務の中で指導するには、なかなか時間が取れなかった」であった。

【教えるためにはさらに勉強が必要であり、そのことで自分の知識も深まった】

このカテゴリーは、フットケア技術はただ足洗うだけではないことを教えるには自分自身の研鑽が必要と認識したことを示している。代表的な記述は「教えるためには自分もさらに勉強する必要がある、良い経験となった」「フットケアは単に洗うだけでなく角質のケアも含まれると分かった」であった。

【フットケアを難しく考えずに見てもらおうことから始め、受講者以外の職員に周知していく必要がある】

このカテゴリーは、受講者以外の職員の参加を促すには、ケアを難しく考えず、まずは周知が必要であることを示している。代表的な記述は「他者の手技を見学するだけでも改善点が見え気づきは多い」「ケアとして難しく考えずに気軽に取入れることが必要」であった。

【業務のルーチンとしてフットケアを取入れるという環境作りが必要である】

このカテゴリーは、フットケアを職場に定着させるためには、シフト調整により勤務の中にFC教育プログラムを組み込み、ある程度強制的に実施していく必要があるということを示している。代表的な記述は「シフトを調整して業務の中にFC教育プログラムを組み込めるようにする」「日時を決め、ある程度強制的に実施することが必要」であった。

考 察

1. 施設内指導者によるFC教育プログラムの受講者への教育効果

チェックリストの全項目の合計得点の中央値が上昇したことから、受講者のフットケア技術は向上したと言える。その中でもプログラム実施後に得点が増えた8項目は、フットケア開始時の“必要物品の準備”“感染予防”の技術、受講者の多くが初めて経験する“足の観察”や“ナイロン袋の中で足を洗う”技術、そして“洗った足をバスタオルで巻いて保温する”“終了時のねぎらいの声かけと体位を元に戻す”といったフットケア対象者への心配りを含む技術である。一方、得点に変化がなかった12項目の多くは“泡をつくる”“ヤスリをかける”など単一の手技項目であった。このように施設内指導者は手技だけではなく、開始時の準備、新しい技術、ケア対象者への配慮などを直接丁寧に指導していた。小澤が、OJTは業務に密着した実践的知識や技能や態度の習得への支援である¹¹⁾と述べているように、施設内指導者は技術だけでなく考え方や態度についても指導しており、施設内指導者によるFC教育プログラム

は、教育効果があったといえる。

2. 施設内指導者によるFC教育プログラムの運用効果

1) FC教育プログラムが受講者にもたらしたメリット

施設内指導者が実施したFC教育プログラムは受講者にとって、指導が受けやすく、指導者の経験から技術の要点や工夫点なども享受できるというメリットがあった。FC教育プログラムにおいて受講者は、指導者が職場の仲間であるため安心感があり、業務の中でマンツーマン指導やケア対象者の反応による実践の評価をその場で得ることができた。そのため、チェックリストの得点も向上したといえる。西田はOJTのメリットとして、仕事上のスキルを効果的に学習することができる¹²⁾ことをあげている。また加藤は、OJTにおける指導は具体的な場面を利用して行われるため、指導内容や指導の結果が明確であり、実践的な技能が身につく、能力の向上という意味でも優れている¹³⁾と述べている。したがって、FC教育プログラムをOJTとして運用することは、受講者にとって有益であり、技術力の向上に寄与するものと考えられる。

2) FC教育プログラムを実践した施設内指導者の手応えや課題(表3)

(1)FC教育プログラムを実践した施設内指導者の手応え【高齢者は、足が綺麗になったことを喜び爪も気にするようになった】【受講者が足・爪をよく見て、異常があれば看護師に報告をするようになった】【受講者以外

表3 施設内指導者によるFC教育プログラムの手応えや課題

カテゴリー
高齢者は足がきれいになったことを喜び爪も気にするようになった
受講者が足・爪をよく見て、異常があれば看護師に報告をするようになった
受講者以外の職員は興味・関心を示したが、フットケアを実践することはなかった
指導者として受講者に教えるのは難しく時間調整も難しかった
教えるためにはさらに勉強が必要であり、そのことで自分の知識も深まった
フットケアを難しく考えずに見てもらおうことから始め、受講者以外の職員に周知していく必要がある
業務のルーチンとしてフットケアを取り入れるという環境作りが必要である

の職員も興味・関心を示したが、フットケアを実践することはなかった】は、FC教育プログラムを実践した手応えとして見出したカテゴリーである。

指導により受講者には、【受講者が足・爪をよく見て、異常があれば看護師に報告をするようになった】という成長みられ、ケアを受けた高齢者にも変化があった。【受講者以外の職員も興味・関心を示したが、フットケアを実践することはなかった】は、受講者以外の職員に対しては実践に導けなかった残念さが窺えるが、指導者として、受講者の成長やそのケア対象者の変化、受講者以外の職員の反応に関心を向けて自己の指導を評価している。西田は、OJTにおける指導的立場の人には、対象者の日々の実践を見て「できている」「できていない」を捉え、評価する力が必要である¹⁴⁾と述べている。つまり、設内指導者になったことで、他者の状況にも目を向けることができるようになった変化は指導者としての成長であり、指導者にとっての成長体験である。高橋が、リーダーシップの発揮について、「少しでも成長できた」と感じられる体験をスモールステップで積み重ねていくことが成功の鍵¹⁵⁾と述べているように、こうした成長体験の積み重ねが指導力の向上に繋がると考える。

(2) 施設内指導者となることの難しさ

【指導者として受講者に教えるのは難しく時間調整も難しかった】【教えるためにはさらに勉強が必要であり、そのことで自分の知識も深まった】は指導者になることの難しさとして見出したカテゴリーである。

施設内指導者となった看護・介護職者は、“教える”という役割を通してその難しさとさらなる自己研鑽の必要性を感じている。土井らは、施設内研修で講師となった介護福祉士は、指導者の立場になるとうまく伝えようと気負うことや話し方の難しさなどから、戸惑いや不安・緊張という感情を抱く傾向にある¹⁶⁾と述べている。また加藤は、OJTの効果は指導者の力量に左右される¹⁷⁾点が問題であるとしている。そのため、施設内指導者によるFC教育プログラムの運用により施設の教育体制を構築していく場合、指導者への支援は重要になる。指導により受講者のフットケア技術が向上したことを周囲が承認することで、指導者がその指導に自信や誇りを持ち、自己研鑽を続けることのできるような職場風土を作ることが、施設内指導者の育成につながると思う。

(3) 施設内完結型の教育体制構築への課題

【フットケアを難しく考えずに見てもらふことから始め、受講者以外の職員に周知していく必要がある】【業務のルーチンとしてフットケアを取り入れるという環境作りが必要である】は施設の教育体制構築への課題として見出したカテゴリーである。

施設内指導者によるFC教育プログラムの運用で、施設の教育体制を整えていくには、多方面からの支援を提

供できる組織的な支援体制が必要である¹⁸⁾と土井らは述べている。しかし、フットケアに関心のない職員も多い中では、まずケア場面を見せ、全体研修なども実施してフットケアを周知することから始め、【業務のルーチンとしてフットケアを取り入れるという環境作り（が必要である）】を組織として検討する必要がある。そのうえで施設内完結型の教育体制構築のためには、「シフトを調整して業務の中にFC教育プログラムを組み込めるように（する）」し、業務にFC教育プログラムを組み込み、組織全体で取組むことが重要となる。

3. 施設完結型教育体制構築への示唆

施設完結型教育体制構築のためには、まず指導者を育てることが必須であると同時に指導者としての成長体験を積み重ねることができるよう施設全体のバックアップも必要である。そのため、初めは外部講師を導入ながら段階的に教育体制を構築していくことが求められる。

本研究の限界と課題

本研究は、限られた施設で、1回FC教育プログラムを受講したのみの看護・介護職者が指導者となったため、施設内指導者によるFC教育プログラムの運用効果についての一般化は困難である。今後OJTとしてFC教育プログラムの運用を重ねていく必要がある。

引用文献

- 1) 丸山 順子, 尾台 安子 (2008) : 実務経験者の職場研修の実態と介護技術講習会が受講生の意識変化に果たす役割 松本短期大学研究紀要 (0910-7746) 17号 Page119-128
- 2) 永井さつき (2021) : 介護老人福祉施設における介護職者のフットケア教育プログラムの有効性の検討 愛媛県立医療技術大学紀要 (1880-5477) 18巻1号 Page23-29
- 3) 小木曾加奈子, 安藤 邑恵, 平澤 泰子, 阿部隆春 (2010) : 介護老人保健施設における認知症ケアに対する職場教育の課題について、岐阜医療科学大学紀要(4) Page27-32,
- 4) 前掲 1)
- 5) 前掲 2)
- 6) 加藤 伸司 (2002) : 老人福祉施設におけるケアの実態と問題点 高齢者福祉従事者への研修プログラムのあり方 老年精神医学雑誌 (0915-6305) 13巻12号 Page1424-1429
- 7) 西田 朋子 (2016) : 新人看護師の成長を支援する OJT, Page34-39, 医学書院

- 8) 池田清子 (2013) : 高齢者におけるフットケアの重要性. はじめよう! フットケア 第3版. 日本フットケア学会 編, 18-22, 日本看護協会出版会
- 9) 山口晴美 (2016) : ナースが行う 実践! フットケア 実技速習セミナー, 32-48 92-94, メディカ出版
- 10) 柳井田恭子, 谷口好美 (2016) : 足浴・フットケア, 根拠と事故防止からみた老年看護技術 第2版, Page248-258, 医学書院
- 11) 小澤知子 (2012) : 教育担当者のOJTにおける教育的支援について 新人看護師の点滴静脈内注射技術指導場面をととして 日本看護学会論文集 : 看護管理42号 Page115-118
- 12) 前掲 7)
- 13) 前掲 6)
- 14) 前掲書 7) Page26-27
- 15) 高橋俊之 (2018) : すべての人がリーダーシップを發揮できるようになる意義とその方法. リーダーシップ教育のフロンティア. 中原淳 監修 Page144-145, 北大路書房
- 16) 土井敏之, 山田知絵, 中村裕子 (2016) : 施設内研修の講師を担う職員の思いと必要な支援に関する研究 認知症介護実践者へのインタビューを通じて 日本認知症ケア学会誌15巻3号 Page667-676
- 17) 前掲 6)
- 18) 前掲 16)

謝 辞

本研究を遂行するにあたり, ご協力いただいた介護老人福祉施設の施設長, 研究参加者をはじめとする職員の皆様に心より感謝申し上げます。

なお, 本研究は, 平成30年度愛媛県立医療技術大学教育・研究助成費を受け実施した。また, 第40回日本看護科学学会学術集会で発表した内容に加筆修正したものである。

利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

要 旨

本研究では, 先行研究においてその有効性が確認された看護・介護職者のフットケア技術向上のためのFC教育プログラムを施設内指導者が実践し, OJTとしての運用効果を検証した。施設内指導者によるFC教育プログラムの実施においても, チェックリストの得点は上昇し, 受講者への教育効果が認められた。FC教育プログラムの運用効果としては, 受講者にとっては指導が受けやすく, 指導者の経験や工夫点などを享受できるというメリットが認められた。また指導者にとっては【受講者が足・爪をよく見て, 異常があれば看護師に報告をするようになった】といった手応えがあり, 【指導者として受講者に教えるのは難しく時間調整も難しかった】という施設内指導者になることの難しさを感じさせるものであった。一方で, 介護老人福祉施設における教育体制構築への課題も見出すことができた。まずは指導者の育成とそのための施設全体のバックアップと段階的な教育体制構築の必要性が示唆された。